日本一の貿易港神戸が産んだ日本一

木　山　　　実
アジアにおける近代大阪の発展研究班委嘱研究員
関西学院大学商学部教授

1　はじめに

幕末のいわゆる“安政五ヶ国条約”により日本が欧米諸国に向けて開港されたのは 1859 年のことであったが、その際、開港されたのは神奈川（横浜）、長崎、箱館の 3 港のみで、兵庫（神戸）と大阪の開港は 1868 年にずれ込んだ。周知の通り、大阪港は神戸に比して遠浅であったため神戸の方が大型船が停泊しやすく、関西での貿易の中心的な役割は神戸港が担うようになっていく。そして図 1 に示したように、神戸開港から約半世紀後の 1917（大正 6）年には神戸港の貿易額は横浜港のそれを抜いて、日本一の貿易港になるにいたった。

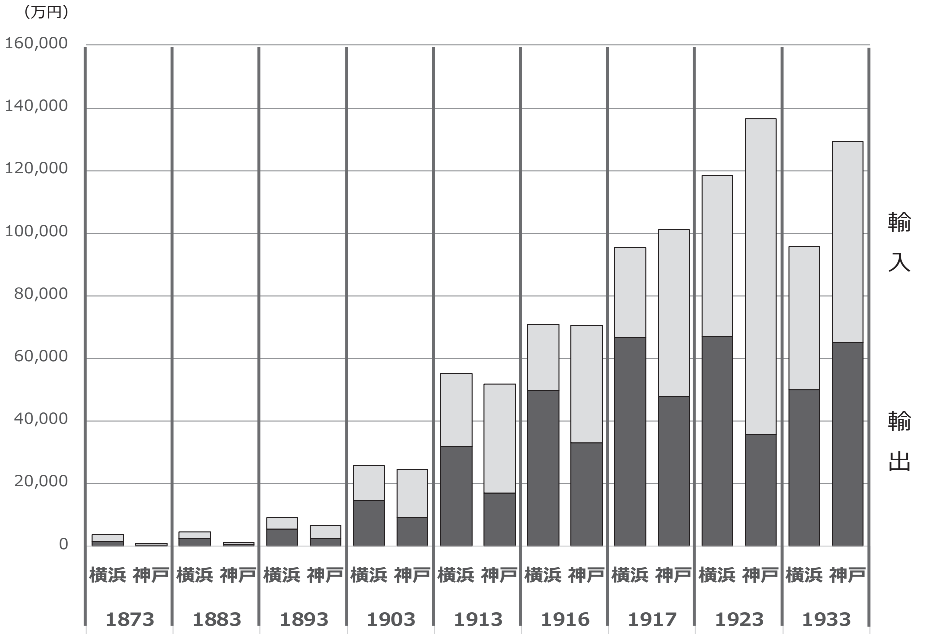

図 1　横浜港と神戸港での貿易［輸出入］取扱額推移
（資料）『日本貿易精覧』（東洋経済新報社、1975 年）p.407、p.415 をもとに作成。

1920（大正９）年には日本で初めて国勢調査が実施されるが、その際の人口調査で神戸の都市人口は61万弱であり、これは１位の東京市（217万人）、２位の大阪市（125万人）に次ぎ３位であった。４位は京都市（59万強）であったから、ここで神戸は江戸時代以来「三都」と称された江戸・大坂・京都の三大都市体制を突き崩したことになる。

江戸時代の神戸は、中世からすでに港町としての繁栄をみせた兵庫地区に２万人ほどの人口を擁する都市ではあったが、これよりも上位に江戸・大坂・京都をはじめ人口10万人を擁する金沢、名古屋などがあり、それほど上位に入っていたわけではない。それが大正期には人口で３位の都市になったのである。

本稿では、神戸が日本一の貿易港になるまでにみられた諸相、ならびに神戸が日本一の貿易港になったことから派生して産み出された「日本一」を概観することを通じて、近代神戸の特質について考察してみたい[1)]。

2　神戸港の特徴―横浜港と比較して―

（１）初期の直輸商社

神戸開港は横浜の開港に９年ほど遅れた。神戸開港の時期はすでに日本人の海外渡航の禁が解かれた1866（慶応２）年から２年ほどが過ぎていたから、日本人が海外に出向いて貿易を行うことは可能ではあった。だが実際に海外に出向いて貿易を行おうという日本人はきわめて少なかった。そこでは日本商人が開港場（居留地）において外商に生糸・茶など日本の商品を売込んだり、外商から綿糸・綿布・毛織物などの舶来品を買い取るという、いわゆる居留地貿易のスタイルがとられた。この居留地貿易という形式では、あくまで日本商人が日本に来航する外商に依存し、外商を通じて輸出入を行うにすぎなかった。

1874年の日本の外国貿易での日本商人の取扱比率は輸出で0.6％、輸入で0.3％、輸出入合計で0.4％。77年でも輸出で3.6％、輸入で1.6％、輸出入合計で2.5％であった[2)]。この数字に示される通り、貿易のほとんどは外商によって担われ、外商が主導権を握った。これに応じて居留地では外商による契約の一方的な破談や買い叩きなどの横暴が目立つようになっていた。これは日本人が外国貿易の知識やノウハウも持たないことによって引き起こされた弊害であったが、日本人の側からはこのような状態は屈辱であり、そこで経営ナショナリズム的な気風が生じ、明治の早い段階から貿易上の主導権を日本側に取り戻そうとする“商権回復運動”が起こってくる。

この運動の一環として、日本人の経営による貿易商社がいくつか設けられた。“商権回復運動”

１）本稿は2015年11月18日の産業セミナーで筆者が講演した内容に加筆修正したものである。
２）山崎広明「日本商社史の論理」（東京大学『社会科学研究』第39巻第４号、1987年）p.159。

の理念に照らすと、その貿易商社は国内に店舗を置くのみならず、海外にも支店を設置し、かつその海外支店には日本人スタッフが派遣されてその支店長の職に就き貿易を担うことが理想とされた。このような商社は直輸商社と呼ばれたが、こうして外商に依存せず、日本と海外との間で直接取引が可能となると考えられたのである。外貨獲得を目論む明治政府もこの商権回復運動を資金融資などのかたちで後押しした。そして1873（明治6）年、大倉喜八郎によって大倉組商会が設けられたのを皮切りに、起立工商会社（1874年設立）、広業商会（76年）、森村組（76年）、三井物産（76年）、同伸会社（80年）、貿易商会（80年）などの日本商社が次々と設けられた。これらの商社はいずれも東京か横浜に拠点（本店）を置く、いわば関東系商社といってよい[3)]。

明治前期における関西の経済力はかなり大きかったから、その主要な貿易港である神戸を拠点にして海外支店を有するような日本商社が設けられても不思議ではないと思われるが、そのような商社は実際には、和歌山出身の濱田篤三郎が雑貨類のイギリス向け輸出のために1881年に設けた丸越組、それと伊予大洲出身の池田貫兵衛が茶商として1882年に朝鮮の釜山と元山に支店を設置した事例ぐらいしか知らない。しかもこれらは永続的に貿易を行った事例ではない。[4)]。神戸に本店を置き、かつ海外支店も置いて直取引を行った商社としては兼松や鈴木商店が有名であるが、兼松は1889年に設けられ、翌90年に豪州シドニー支店を設けて直取引を開始する。また鈴木商店も明治の早い時期に神戸に砂糖引取商として開業していたが、鈴木が海外に支店を設置するのは明治後期に入ってからである。1873年から1880年代前半にかけての時期に商権回復運動の一環で直輸商社がいくつか設けられたといっても、それは東京や横浜という関東を中心にみられた現象であり、神戸など関西圏ではその動きは低調であったといってよいであろう。

上で社名を掲げた関東系の商社は、森村組を除いてはたいてい政府要人との間に強いコネクションを有していた。横浜に次ぐ取引額を誇り、また関西圏の中心的な貿易港である神戸に拠点を置く直輸商社設置の動きが明治10年代前半ぐらいにかけて低調であったという事実をみるとき、初期の直輸商社を創設するにあたっては、中央政界に近い東京や横浜に位置しているということがいかに重要であったかのかが改めて察知されよう。

上でみた関東系の商社のなかで生き残って、戦前期をつうじてさらに成長・拡大したものは大倉組商会（のち大倉商会）と三井物産ぐらいである。貿易商社としての森村組は存続はしたが、明治後半や大正期にはそれほど大きな存在感はない[5)]。森村は明治期の後半に貿易業よりも

3）ただし1876年に設けられた広業商会は、1883年頃に本店を函館に移した。木山実『近代日本と三井物産』（ミネルヴァ書房、2009年）pp.128-129。

4）濱田篤三郎については、河合寿造『日本新立志篇』（偉業館、1893年）pp.89-98。池田貫兵衛については、『神戸貿易協会史』（神戸貿易協会、1968年）p.69。

5）森村の貿易部門は現在でも森村商事として営業を続けているが、その規模はそれほど大きいものではない。

むしろ陶磁器生産に進出して日本陶器合名会社（現ノリタケ）を設け、さらに東洋陶器（現TOTO)、日本ガイシ、伊奈製陶（INAX）などを擁する森村財閥を形成し、貿易業者というよりむしろメーカーとしての色彩を濃くしていく。その意味では、大倉組も土木建設業や鉱業に軸足を移していったので、貿易業よりもそちらの方が存在感があったといえるかもしれない。この他の起立工商会社、広業商会、同伸会社、貿易商会などはいずれも経営が軌道に乗らず、破綻したり他社に吸収されている。たとえ政府要人との間にコネクションを有し、それに依拠して貿易商社が設立されたとしても、その経営を維持させていくことはかなり困難なことであった。

（２）主要輸入品

先にみた図１によると、横浜港に比べて神戸港は輸入の比率が高いということが指摘できる。そこで神戸港ではどのようなものが輸入されていたのかを見たのが表１である。同表によると、神戸港の輸入品のなかでは綿花が圧倒的な比重を占めていたのがわかる。

表１　神戸港の主要輸入品の変遷

単位：千円

1902（明治35）年			1918（大正7）年			1930（昭和5）年		
1	綿花	66,873	1	綿花	313,927	1	綿花	239,025
2	米	7,013	2	鉄板	44,972	2	機械類	26,207
3	石油	5,477	3	鉄条竿板	41,668	3	羊毛	24,014
4	油粕	3,599	4	羊毛	33,440	4	毛織糸	12,982
5	モスリン	3,012	5	米	30,352	5	生ゴム	12,485
6	機械類	2,702	6	鉄類	24,343	6	油粕	11,141
7	豆類	2,486	7	機械類	19,286	7	豆類	10,449

（資料）『神戸貿易協会史』（神戸貿易協会、1968 年）p.139 をもとに作成。

大阪財界の重鎮松本重太郎らが紡績会社の設立を画策していたところに、東京財界の指導者渋沢栄一が合流して 1882 年に大阪紡績会社が設けられ操業を開始するが、同社は好業績をあげた。この大阪紡績の成功が呼び水となって西日本を中心に全国的に綿糸紡績業に参入する動きがみられ、日本は本格的な産業革命の時代を迎えることになる。

明治期に簇生した紡績業は当初国産の原綿を使用していたが、まもなく清国産の綿花を、さらにはインド産綿花、アメリカ産、エジプト産などにも使用を拡大していく。特に明治後半以降はインド綿花の比率が高まるが、これらの外国産綿花の輸入の拠点となったのが神戸港であ

った。

神戸港の貿易額が日本一になった1917年の各紡績工場の状況を記した『綿糸紡績事情参考書(大正6年下半期)[6]』によると、当時、大阪から神戸にかけての阪神地区には、鐘淵紡績・兵庫工場の94,121錘を筆頭に、尼崎紡績（現ユニチカ）の尼崎工場47,212錘、津守工場（大阪）68,728錘、福島工場（大阪）81,404錘、東洋紡績の三軒家工場（大阪）55,456錘、四貫島工場（大阪）49,272錘、大阪合同紡績（現、東洋紡）の神崎工場63,968錘、内外綿（現、新内外綿）西宮工場24,256錘など、全国的にみても規模の大きな紡績工場が立ち並んでいた。大阪から南の和歌山にかけての地域にも、岸和田紡績の本社岸和田工場46,088錘、春木工場（泉南）46,720錘、野村工場（岸和田）31,488錘などをはじめ多くの紡績工場があり、阪神地区を中心に大阪湾を取り囲んで紡績工場がひしめき合っていたといえる[7]。神戸港は、これらの紡績工場をはじめ西日本各地の紡績業が必要とした外国産綿花の輸入拠点であった。

(3) 主要輸出品

紡績会社は綿糸を生産するのみならず、綿布生産をも兼業するところが増えたので、それらの企業は綿糸、綿布を生産していたということになる。よってインドや中国などから大量に輸入された綿花は紡績会社で綿糸や、さらには綿布に加工され、それら生産品の少なからざる部分が、朝鮮や中国市場を中心としたアジア圏に輸出された。阪神地区を含んだ関西圏は、綿産業の中心地であったから、神戸港はそれら綿製品の輸出拠点にもなった。

神戸港の輸出品を示した表2の1902年、1918年では、輸出品の首位が「綿織糸」と示されているが、それらの綿製品が2位以下を大きく引き離している。また綿製品の派生品としての「生金巾・シーチング」やメリヤス製品も徐々にランキング上位に現れてくるのが読み取れる。

戦前期日本最大の外貨獲得商品であった生糸については、その輸出はもっぱら横浜港がほとんど独占するところとなっていた。神戸の政財界も生糸輸出でのシェアを高めようと努めなかったわけではないが、主要な生糸産地が長野県や北関東などの東日本に多かったことから、横浜の牙城を崩すことはきわめて困難であった。しかし1923年の関東大震災で京浜地方が大きな被害を受けたことを機に、神戸も生糸・絹物輸出に食い込んでいくことになる。そして震災の起こった1923年には日本の絹物輸出は横浜が6に対して、神戸はいきなり4を担ったという。そして翌24年には横浜からの絹物輸出額は1,038万円まで低落したのに対し、神戸は1億1,370万円を取扱い、一挙に地位を逆転させた[8]。その後も神戸では盛んに生糸・絹物製品が輸出されるが、表2の1930年で、神戸港の輸出品の首位が生糸として示されている。

その表2で2位以下に注目してみると、綿製品には及ばないが、マッチや花筵、麦稈真田な

6）木崎堅介編『綿糸紡績事情参考書』大正6年下半期（大日本紡績連合会、1918年）。
7）最も大きな規模を誇った鐘紡は、阪神近隣では淡路島の洲本工場37,276錘、高砂工場37,040錘も有した。
8）前掲『神戸貿易協会史』p.66、p.137、p.147、p.149。

表２　神戸港の主要輸出品の変遷

単位：千円

1902（明治35）年			1918（大正7）年			1930（昭和5）年		
1	綿織糸	14,987	1	綿織糸	72,272	1	生糸	126,839
2	マッチ	7,471	2	船舶	27,795	2	生金巾・シーチング	28,742
3	花筵	6,551	3	マッチ	23,277	3	綿メリヤス肌衣	14,212
4	米	5,748	4	銅	14,236	4	富士絹	13,725
5	銅	4,404	5	でん粉	13,631	5	羽二重	9,338
6	茶	3,725	6	生金巾・シーチング	11,403	6	紙類	8,894
7	麦稈真田	2,862	7	ペンキ	9,757	7	精糖	8,495
8	陶磁器	1,641	8	陶磁器	8,207	8	帽子	8,228
9	寒天	783	9	紐釦	8,537	9	魚鯨油	5,295
10	扇子類	770	10	精糖	7,073	10	タイヤ	4,907

（資料）前掲『神戸貿易協会史』p.137をもとに作成。

どのいわゆる雑貨という範疇で括られる商品も多く輸出されていたことがわかるであろう。雑貨とは「雑多の貨物。また、こまごまとした日用品」（『広辞苑』）を指し、ややわかりにくい言葉であるが、表２でアミカケで示したマッチ、花筵、麦稈真田、陶磁器、扇子、紐釦、紙類、帽子などは雑貨に分類されるものである。輸出品に注目した場合、数量的には上述の綿製品が多くの比重を占めたものの、神戸港は雑貨輸出の拠点という側面ももっていたということができる。神戸の雑貨といえば、何といってもマッチが代表的であり、表２の1902年と1918年でもマッチが上位に入っている。

開港以後、外国産のマッチが大量に日本に輸入されたが、1877年に神戸刑務所にマッチ工場を設置したことを契機に、79年には本多義知が明治社を、81年には瀧川辨三[9)]が清燧社、秦銀兵衛が第二清燧社を設けたように、これ以後も神戸でマッチ生産に参入するものが相次いだ。そして生産されたマッチの一部は早い段階から上海に輸出されたという。そして1897年には神戸のマッチ工場の数は60に達し、神戸の総工場の６割はマッチ工場で占められるにいたった。日本のマッチは中国や東南アジア方面に盛んに輸出され、さらに第１次大戦時には、世界各国に輸出先を拡げた。そして日本の輸出マッチはスェーデン・マッチ会社、アメリカのマッチ・

９）マッチ王として名を馳せた瀧川辨三は、神戸のマッチ産業が絶頂期にあった第１次大戦中の1918年に瀧川学園（現、滝川中学・高校）を設けている。

コーポレーションと世界市場を三分する絶頂期を迎えるのである。そしてこの時期、神戸のマッチは全生産の８割が輸出されたのであった。

このような絶頂期にあった1918年時点で、神戸を代表するマッチ会社８社の工場は50で労働者は１万人に達していた。これらの労働者の中には10歳以下の者もおり、それらの労働者たちは長時間労働、低賃金に耐えた。一見華やかにみえる神戸のマッチ産業の隆盛も、このような労働者たちによって支えられていたのである。

大正から昭和にかわる頃、低開発国でもマッチ工業が勃興し始め、表２の1930（昭和５）年でマッチがトップ10に入っていないことに示される通り、神戸のマッチ産業は、先細りの傾向にあった。第２次大戦後にはこの傾向はますます強まり、神戸に残存していたマッチ工場もおおむね播磨地方に移動し、往年の隆盛は求むべくもない状況となるのであった[10)]。

3　神戸が産んだ日本一

（１）貿易商社鈴木商店

鈴木商店は1874（明治７）年頃に鈴木岩次郎が神戸で砂糖引取商として開業したものである。1894年に鈴木岩次郎が死去し、岩次郎の妻よねは店員金子直吉に経営を任せ、これ以後、鈴木商店は金子の指揮のもと躍進していくことになる。

鈴木は北九州の門司近在の大里に製糖所を設けていたのを明治末に売却して得た資金などをもとに、他社を買収したり新たに企業を立ち上げるなどして、それらを傘下に収め鈴木コンツェルンを形成した。また貿易商としての鈴木商店も取扱商品を拡大し、国内外に店舗網を築いて総合商社路線をとり、貿易業界に君臨した三井物産を猛追した。

第１次世界大戦の戦場にならなかった日本には世界中から注文が殺到し、日本経済は異常な好景気を謳歌する。このいわゆる「大戦景気」の時期に、造船や海運という船舶関係の業界と並んで高利潤をあげたのは貿易業界であったが、神戸港の貿易額が横浜港のそれを抜いた1917（大正６）年に、この波に乗って神戸に本店を置く鈴木商店も初めて三井物産の取扱高をおさえ、日本一の貿易商社にのし上がったとされている。

1917年に鈴木商店の取扱高が三井物産のそれを凌いだということを明示的に主張したのは桂芳男氏（故人）であった。桂氏が一連の著作でこのことを指摘したのは1970年代後半のことであった[11)]。桂氏は朝日新聞社が発行していた『朝日経済年史』（1928年版）に掲載された鈴木の年商と、栂井義雄『三井物産会社の経営史的研究』（東洋経済新報社、1974年）に掲載された

10）前掲『神戸貿易協会史』pp.61-63。

11）桂芳男氏には「産業企業の育成と商社―鈴木商店―」（宮本又次ほか編『総合商社の経営史』東洋経済新報社、1976年、所収）、『総合商社の源流鈴木商店』（日本経済新聞社、1977年）などをはじめ、多くの鈴木商店に関する著作物がある。

三井物産の同年の年商を比較して上のように主張したのであるが、鈴木の年商が掲載されているという『朝日経済年史』は、鈴木商店が1927年に破綻した翌28年に刊行されたもので、そこではわずかに「大正六年における同店の商取引高を聞くに、内地外国間貿易一二億、外国間の貿易、所謂出商業高三億四千万円の巨額に達した由である。」と記されているのみで、ここから桂芳男氏は内地外国間12億円、外国間貿易3億4000万円を合計した15億4000万円を1917年の鈴木の年商と判断し、栂井著『三井物産会社の経営史的研究』での三井物産の同年の年商額10億9504万円と比較して、鈴木が1917年に日本一になったと主張したのであった。桂芳男氏による指摘以前にも鈴木商店が三井物産を抜いたとする見解がなかったわけではない。例えば、鈴木商店の躍進をもたらした金子直吉の伝記（1950年刊行）では次のような記述がある。

（鈴木商店の：筆者注）一年の商売高は十億を算し、大正八、九年の全盛時代には十六億円に上り日本に於て他の追随を許さなかつたのである。三井物産の昭和三年に於ける商売高は十二億六千万円で、其の時は物産創立以来の最高記録であつたが、前大戦前後は十二億円位であつたから、当時はさすがの三井も鈴木に及ばなかつたと見える[12)]。

金子の伝記は第1次大戦期における鈴木商店の躍進ぶりをこのように記すわけであるが、何年の時点で鈴木が三井を凌いだかについては明確ではない。これに対して上述の通り、桂芳男氏は1917（大正6）年に鈴木が三井を越えた、と明確に指摘したのであった。

ところが近年このような鈴木商店が三井物産の取扱高を抜いたとする見解に疑問を投げかける鈴木邦夫氏の論稿[13)]が現れた。鈴木氏は東京大学経済学部図書室所蔵で帝国興信所神戸支所の手による「合名会社鈴木商店調査書」1917年上半期決算が、1917年度（1-12月）の鈴木の取扱高を6億円と推定していることを根拠に、鈴木の1917年の年商6億円を、栂井著『三井物産会社の経営史的研究』での同年の三井物産年商10億9504万円と比較し、「桂説とは逆に約五億円も三井物産が上回る」と指摘している。さらに鈴木邦夫氏は鈴木商店の年商15億4000万円が仮に大戦景気末期の1919年の数値とみても、同年の三井物産の年商は21億3027万円であって、三井物産が約6億円も上回っている。1910年代に鈴木商店は取扱高を急増させたとはいえ、三井物産も同時期に取扱高を急増させており、三井物産は日本商社では第1位の取扱高を維持し、「急追する鈴木商店の取扱高を大幅に上回っていたと考えられる。[14)]」と主張した。

桂芳男氏が依拠した『朝日経済年史』での鈴木商店の1917年の年商に関する記述が伝聞に基づいたやや曖昧な印象を受ける――しかも「同店の商取引高を聞くに」とあるのは『朝日経済年史』の原典に当たってみても一体だれに聞いたのか判然としない――とともに、鈴木邦夫氏が依拠された「合名会社鈴木商店調査書」1917年上半期決算でも鈴木の年商額はあくまで推定であって、確たるものとは言えないように思われる。鈴木商店自身が作成した決算書の類いが

12）白石友治編『金子直吉伝』（金子柳田両翁頌徳会、1950年）p.248。
13）鈴木邦夫「三井物産ニューヨーク事件とシアトル店の用船利益」（『三井文庫論叢』第48号、2014年）。
14）桂芳男氏の見解も含めて、同前、鈴木邦夫、pp.68-69を参照。

残されていない以上、大戦景気の時期の鈴木商店と三井物産の年商を比較することは困難であると改めて感じさせられる。

ただ三井物産のサイドからは、鈴木商店の猛追をかなり警戒していたであろうことは種々の史料から確認できる。例えば、三井物産自身が作成した「当社及反対商　関係事業一覧（大正七年六月）[15]」なる史料は、三井物産にとっての反対商（すなわち競合他社）に関する調査報告書であるが、そこでは筆頭に鈴木商店に関する分析が載っているのみならず、また他の商社に比べてかなり多くの分量が割かれている。筆者は鈴木商店の年商が三井物産のそれを抜いたのかどうかは断定しかねるが、1位になったのかどうかは別にしても、鈴木が大戦景気の波に乗って貿易業界の覇者三井物産を猛追して急拡大したことは間違いない。

（2）世界的な傭船市場―神戸海運集会所―

第1次大戦による大戦景気で貨物の動きが活発化するなか、大戦によって船舶不足が深刻化するが、このような状況下、荷主・傭船主・船主を仲介する仲立ち業者が簇生し、市場の運賃、傭船料、船価は騰貴に次ぐ騰貴を繰り返した。だが大戦による好景気は往く往くは去り、海運市場も沈静化することが予想されたから、イギリスのロンドン・バルチック取引所（ボルチック取引所と表記されることもある）を模範として、海運市場の均衡と統制の保持、物資分配の円滑化、船舶疎通のための一機関を設けることが、当時三井物産船舶部長であった川村貞次郎を中心に、神戸の汽船会社経営者らから提唱された。そうして1921（大正10）年9月に株式会社組織として神戸海運集会所が設立された。この集会所の会長には集会所の設立を主導した三井物産の川村貞次郎が就任する。

貿易業界に君臨した三井物産は、明治期の早い段階から自社船を有していたが、それらはもっぱら上海、香港方面への石炭輸送に使用され、遠洋方面には外国船を傭船して輸送されることもあった。1890年代末期には、それら社有船は石炭以外の物品輸送にも使用されるようになっており、また1900年代には米・大豆・砂糖・綿花などの輸入のために海運企業から船舶を手配する傭船が増えたことから、輸送体制の整備と強化が各支店・出張所から要望されるようになってきた。このようななか、「取扱商品ノ海上運搬ニ関シ内外各店ノ要求ニ応ジ船舶ノ供給ヲ掌リ往復貨物相互ノ聯結ヲ図リ以テ商務ノ助長ヲ期スル」べく、1903（明治36）年に同社内に船舶部が設置されることになった。当初この船舶部は石炭積出しの首店であった門司支店に置かれたが、翌04年には当時すでに海運市場の中心地となっていた神戸の三井物産支店内に移された。05年末の時点で三井物産は商社でありながら社船12隻、2万7805トンを保有していた。これら自社船を定期運航するとともに、日本郵船や大阪商船という大手海運などからも傭船し

15）三井文庫所蔵史料（物産337-9）。

て貨物輸送にあたっていたのであった[16)]。

そして第１次大戦が勃発して船舶が不足するなか傭船料も騰貴の一途をたどり、上述の通り、三井物産船舶部長の川村が主唱者となって神戸海運集会所が設けられたのであるが、これが組織される以前から神戸はすでに日本では傭船市場の中心地だったのであり、この設置によってその地位は確固たるものになった。そして神戸はロンドンの海運市場に迫る勢いを有し、アジアでは上海、香港にかわる世界的な傭船市場となったのである[17)]。

（３）仲仕と港湾荷役業者上組（かみぐみ）

現代の港湾・埠頭といえば、大型クレーンやフォークリフトなどの機械が貨物の積み卸しに従事している姿を思い浮かべるかもしれないが、明治・大正期の港湾ではそれらの大型機械はもちろん一般化しておらず、ヒトが船舶への貨物の積み卸しを行っていた。そのような港湾荷役に従事した労働者は仲仕と呼ばれたが、沖合のはしけと大型船舶との積み卸し作業に従事するものは沖仲仕、荷船からの陸揚げ作業に従事するものは浜仲仕、また陸上での作業に従事するものは陸仲仕と分類されることもあったようである。1898年の警察による調査では、神戸には約１万3000人、兵庫には約3000人の仲仕がいたという。仲仕の労働時間は１日12時間程度であり、この当時の神戸の仲仕の賃金は、沖仲仕の男で日給33銭、女で日給25銭、浜仲仕の男で日給80銭～２円と幅があり、陸仲仕の男で日給60銭程度であった[18)]。これらの仲仕たちにとって月給は望むべくもないが、同時期の銀行大手の初任給が月給30円を超えていたといわれるから、仲仕たちの低賃金ぶりが察知されよう。大正期の大戦景気で神戸の貿易量はますます増加するから、その日暮らしの仲仕という労働力への需用はますます高まったはずである。神戸が日本一の港都となる過程で、過酷な長時間労働・低賃金に耐えた仲仕の存在は無視しえぬものがあったといわねばならない。

そして各港には、これらの仲仕を管理・統括し、荷主から任されて貨物の積み卸しに従事する専門業者が存在した。神戸で誕生し、日本最大級の港湾荷役業者に成長するのが上組であるが、これも港都神戸が産み出した企業といってよいであろう[19)]。

（４）川崎・三菱両造船所の労働争議

神戸の大工場として忘れてはならないのは、川崎、三菱の２大造船所である。

16）『稿本三井物産株式会社100年史』上（日本経営史研究所、1978年）pp.278-279。

17）神戸海運集会所については、前掲『神戸貿易協会史』p.146、岡崎幸壽編『日本海運集会所20年史』（日本海運集会所、1941年）pp.33-55。神戸海運集会所は第２次大戦後にはもっぱら海事仲裁の機能に特化していく。1966年には本部を神戸から東京に移し、現在も一般社団法人日本海運集会所として活動している。日本海運集会所のホームページ参照。

18）神戸開港百年史編集委員会編『神戸開港百年史』港勢編（神戸市、1972年）p.643。

19）上組については同社のホームページで沿革が詳しく記されている。

川崎正蔵の経営による川崎造船所の工場が神戸に設けられたのは1881（明治14）年のことであるが、川崎は87年には官営兵庫造船所の払い下げを受け、規模を拡大した。三菱もやや遅れて、1905（明治38）年に神戸に造船所を開いている[20)]。これらの造船所は大戦景気の時には高利潤で潤ったが、この好景気のなか、造船所の労働者（職工）たちは米騒動に象徴されるような食料費の高騰に苦しめられた。また大正デモクラシーの風潮が高まりをみせていたこともあり、川崎造船所では1919（大正8）年に職工たちが賃上げなどの待遇改善を求めてストライキに突入した。これを受けて川崎では日本で初めて8時間労働制を採用することとなった[21)]。

いったんは終息したかにみえた川崎の労働争議であったが、社会主義者たちの扇動もあって、三菱造船所の職工も合流するかたちで1921（大正10）年の6月末から再び3万人もの職工が参加する、戦前期日本最大の労働争議に突入した。この争議に対して7月半ばには軍隊まで出動することになったが、争議は結局8月の上旬まで続き、労働者側の敗北という結果に終わるのである。

（5）神戸購買組合と灘購買組合

川崎・三菱の労働争議が起こった1921年に、社会運動家・賀川豊彦の指導のもと、神戸購買組合と灘購買組合が誕生した。この両組合は現在の生活協同組合コープこうべの前身とされるものである。

賀川豊彦は1888（明治21）年に神戸で生まれ、少年期を過ごした徳島で受洗したクリスチャンである。1905年にキリスト教の伝道者を志して東京の明治学院高等部神学予科に入学し、その後神戸に戻って09年から神戸郊外のスラム街に住まいを移し、そこでキリスト教を説きながら救済活動に専念するようになる。現在からみれば神戸にスラム街があったこと自体が驚きであろうが、当時は現在よりも貧富の格差が激しく、その日暮らしの貧民層が神戸の一角で寄り添って暮らしていたのである。

賀川豊彦は1914（大正3）年に渡米し、プリンストン大学と同神学校を卒業後、帰国するが、アメリカ滞在中に目撃した大規模な労働運動に衝撃を受け、日本でも労働運動の先頭に立つことになる。上述の川崎・三菱の労働争議も賀川が指導したとされる。彼はまた救済活動の一環として、英国ロッチデールの生活協同組合をモデルに、実業家の福井捨一、平生釟三郎らと協力して日本でも生協運動を開始する。そうして1921年に神戸と灘の両購買組合が誕生したのであった。購買組合は戦後、生活協同組合とか消費組合と名称を変えるが、神戸と灘の組合が合併して灘神戸生活協同組合となったのは1962年のことであり、さらに1991年には現在の名称

20）神戸の川崎・三菱両造船所については、三島康雄『造船王川崎正蔵の生涯』（同文舘出版、1993年）、同『三菱財閥』（日本経済新聞社、1981年）p.203などを参照。

21）神戸市ホームページ「神戸を知る（8時間労働発祥の地神戸）」参照。

である生活協同組合コープこうべに改められた[22]。

神戸と灘の購買組合ができた1921年は、第1次大戦による好景気も過ぎ去り、反動不況と呼ばれる不況期に入ったその翌年である。これらの購買組合は、低所得に耐えながらその日暮らしの生活を送る人々を救済するべく設けられた廉売機関である。現在では低所得者向けの販売機関というイメージではないが、2010年度にコープさっぽろに販売高首位の座を明け渡す[23]まで、コープこうべは地域生協トップの地位を長らく維持した。

阪神地区は戦前から公私設小売市場のよく展開した地域である。明治末から大正にかけての物価高騰に苦しむ低所得労働者を救済するために政策的に設けられた廉売機関が公設小売市場であり、これに刺激されて私設のものも次々と設けられた。また戦後、「よい品をどんどん安く」をモットーとしたスーパーのダイエーは神戸を拠点にしていた[24]。これらの生協、公私設小売市場、ダイエーの底流に流れるのは「廉売」の機関であるということである。神戸の庶民による廉売機関を求める度合いは、他地域よりも高かったということを意味しているのであろうか。

結びにかえて

2003年のある新聞記事[25]によると、「神戸と聞いて何をイメージするか」の質問に、港（48%）、異国情緒（29%）、ファッション（16%）、六甲山（12%）、グルメ（6%）などの回答が上位を占めた。また「神戸を代表する観光地は？」の質問には、北野異人館街、三宮・元町、六甲・摩耶、居留地などの回答が多かった。神戸といえば、人々は西洋的で華やかでハイカラなものをイメージするのであろう。

大正期に神戸が横浜を抜いて日本一の貿易港になり、人口でも東京・大阪に次ぐ第3の都市に拡大するに至ったその過程では、ここまでに述べ来たったような長時間・低賃金の労働に耐えた夥しい数の労働者や、彼らを含んだ貧民たちが集住するスラム街に象徴されるシーンが多分にみられたのであり、それは華やかでハイカラなイメージからはほど遠いものであったといえるのではなかろうか。それらは近代神戸の光と影のうち、いわば影の部分であったといってよい。

現在のハイカラな神戸のイメージが定着したのは比較的最近のことであり、そのイメージ定

22）コープこうべのホームページにはその歴史や賀川豊彦のことが詳細に記されている。本稿もそのホームページを参考にした。
23）『日本経済新聞』2011年6月12日「コープさっぽろ供給高、初の首位」。
24）戦前の公私設小売市場が戦後のダイエーに与えた影響について歴史的な分析を加えたのは藤田貞一郎氏である。藤田貞一郎『近代日本経済史研究の新視角』（清文堂、2003年）の第12章参照。
25）『読売新聞』2003年1月15日。これは神戸市観光交流課が東京・仙台・福岡で行った神戸に関するアンケート調査に関する記事である。

着には1977年に放送されたNHKの連続テレビ小説（いわゆる朝ドラ）「風見鶏」の影響が大きいとする説もある。そしてその後の都市整備（美化）や1981年のポートピア81の大成功などが重なって現在の神戸のイメージにつながっているように思われる。

神戸といえば開港当初から西洋人が多数来航して、昔からハイカラな雰囲気を漂わせていたと誤解されているようにも思うが、明治大正期の神戸は多分に「影」の部分も有する港湾都市だったのである。